

コロナで顕在化した若者像に関する一考察

田上 正範

How has it impacted youth on the COVID-19 Pandemic?

Masanori TAGAMI

【キーワード】 Z 世代、コロナ世代、いい子症候群、同調圧力

要旨

コロナ禍の影響を受けた若者像の特徴について調査した。さらに、根源と考えられる背景を調べると、協調、同調、共感、普通といった日本特有の感覚があり、1990年頃の若者像にまで遡るに至った。先行文献をたどり、若者像の社会的背景について考察したものである。

1. 背景：昨今の若者像

2023年5月8日、新型コロナウイルスが季節性インフルエンザと同じ5類に移行した。全国の観光地は賑わい、夏祭りや花火大会などのイベントが復活し、ウイズコロナの日常を実感する一方で、感染拡大の第9波の注意も呼び掛けられている (Science Portal: 2023)。

昨今の若者は「Z世代」と称される。パーソルキャリアの人事・採用担当者向けの Web サイト d's JOURNAL (2023) によると、Z世代とは、図1に示すように、1990年代半ば（もしくは2000年代序盤）以降に生まれた世代を指し、1980年代序盤～後半に生まれた「キレる17歳世代」の下の世代である「さとり世代」や「コロナ世代」の一部が該当する。アメリカで生まれた言葉で、X世代、Y（ミレニウム）世代に続く世代とある。

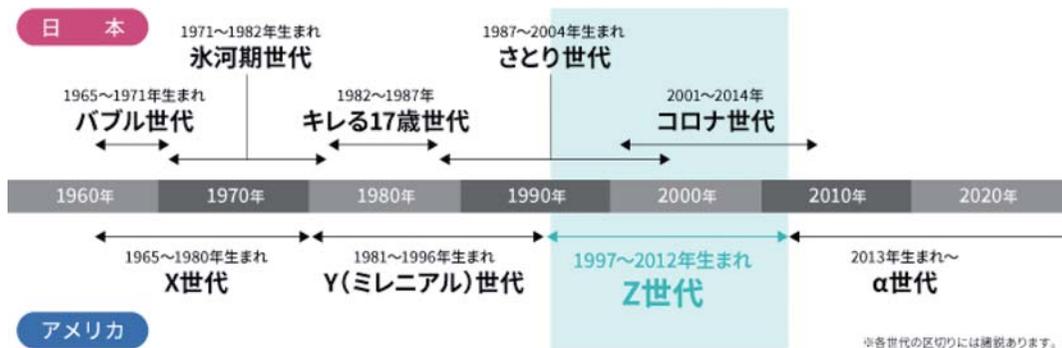


図1 各世代と Z 世代の関係 (引用：d's JOURNAL 「Z 世代の特徴とは」)

d's JOURNAL（2023）は、Z世代の特徴として、

- ・『自分らしさ』を大切にしたい
- ・承認欲求が強く『どう見られるか』を気にする
- ・効率性を重視する傾向
- ・オープンでフラットなコミュニケーションを好む

などを挙げる。

他にも、人材事業を営む alue（2023）は、Z世代の特徴として、

- ・素直で真面目
- ・考え方を柔軟に取り入れられる
- ・やりがいや楽しさを重視する
- ・自分のニーズを重要視する
- ・本質を深く考えることに慣れていない
- ・デジタルネイティブだが PC スキルは低い
- ・自意識・発信欲求・承認欲求が強い
- ・コスパ・タイパを重視する（コストパフォーマンス・タイムパフォーマンス）」を挙げる。

一方、量的な側面では、全国の大学・短大約 300 校で学生約 22 万人が受けた PROG テストがある。その 2022 年度の結果が図 2 である。

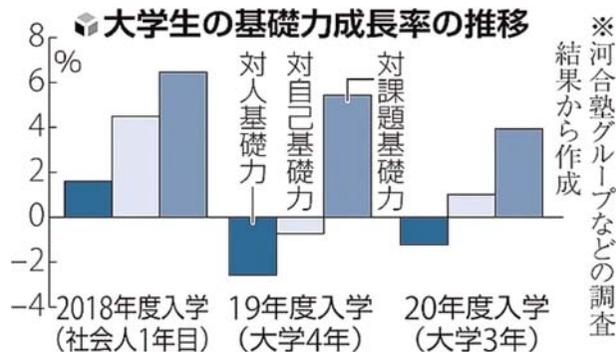


図 2 大学生の基礎力成長率の推移 (引用：読売新聞 2022)

「対人基礎力」：人間関係を構築して協働する力

「対自己基礎力」：感情やストレス、意欲をコントロールする力

「対課題基礎力」：課題を発見・分析したり、計画を立案したりする力

図 2 より、2020 年度入学の大学 3 年生（2022 年度当時）は、コロナ禍前の世代（社会人 1 年目）と比べ、人間関係を構築して協働する「対人基礎力」が低下し、感情やストレス、意欲をコントロールする「対自己基礎力」は 2 年ぶりにプラスに転じ、課題を発見・分析したり、計画を立案したりする「対課題基礎力」はプラスのまま例年並みに推移している。また、2019 年度入学の大学 4 年生（2022 年度当時）と比べると、「対人基礎力」と「対自己基礎力」の停滞感は解消方向にある。2021 年度以降、授業や課外活動などの対面活動が緩やかに回復してきた影響と考えられる

(読売新聞 2022)。

対面活動の緩やかな回復状況については、マスクの着用状況からも確認できる。NHK (2023) によると、2023年3月第1週の時点では、マスクの着用率は2022年から横ばい状態が続いているとある。また、東京新聞 (2023a) では、マスクは「息苦しいから外したい」という意見がある一方で「恥ずかしい」からと着けたがる意見もある。このようにマスクの着用状況からも、横ばい、あるいは、緩やかに回復する様子を確認することができる。

◆大学教育について、あなたは次にあげるA、Bのどちらの考え方に近いですか。



図3 大学教育観 (引用：ベネッセ教育総合研究所 2022)

◆次の項目は1週間(月曜日～日曜日)で何時間くらいになりますか。

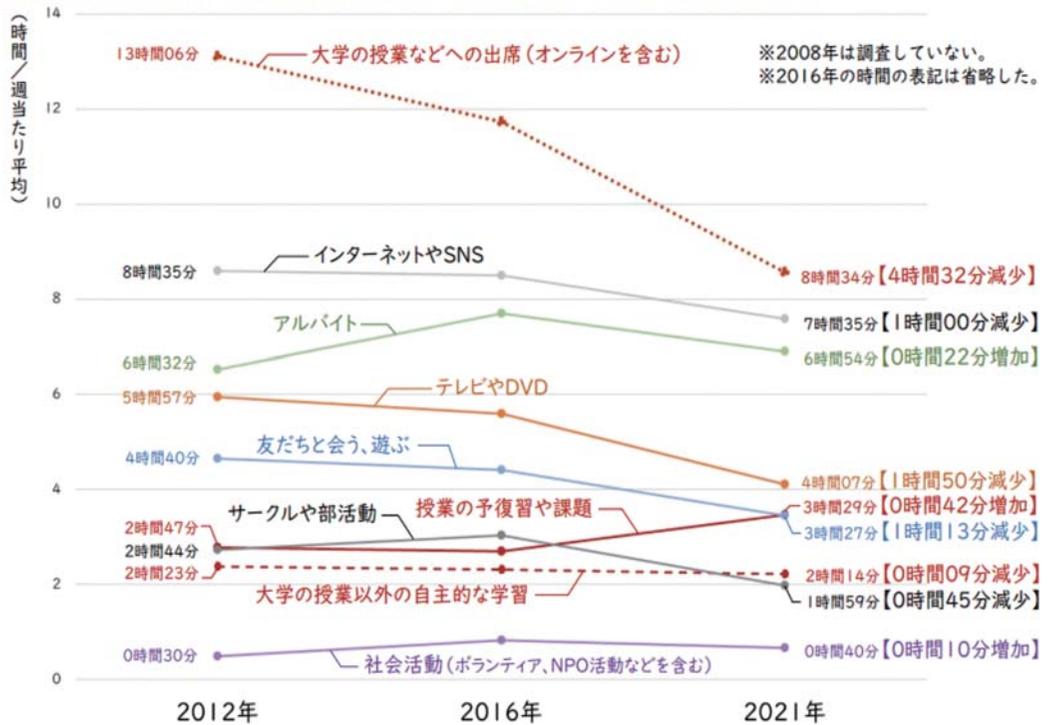


図4 生活時間 (引用：ベネッセ教育総合研究所 2022)

ベネッセ教育総合研究所は、大学生の生活実態調査を2008年から4年ごとに実施している。その第4回調査（有効回答4124名、調査時期2021年12月）の結果を図3、図4、図5に示す。図3は、大学教育観の結果を抜粋したものである。図3より、「あまり興味がなくても、単位を楽に取れる授業がよい」と回答する割合が、2008年以降、増加していることがわかる。

図4は、生活時間を週当たりの平均で示したものである。図4より、「大学の授業などへの出席（オンラインを含む）」は、2012年と比べて2021年は大きく減少しているが、既に減少傾向は2016年（～コロナ禍前）からも確認できる。また、「授業の予復習や課題」は2021年に微増し、「大学の授業以外の自主的な学習」は、2012年から2021年まで変化がないことがわかる。



図5 大学内の友人関係（引用：ベネッセ教育総合研究所 2022）

続いて、図5は大学内の友人関係を示す。図5より、友人が「いない」および「1人」の割合は、2012年以降、増えていることがわかる。同傾向は、大学外の友人関係でも同じであった。まとめると、大学教育に対する教育観は短絡化し、学習時間は減少するが、自主的な学習時間は変わらず、友人がいない大学生が増加していると言える。特筆すべきは、これらの傾向が2020年に発生したコロナ禍の以前から兆候があったことである。そして、コロナ禍によって、より顕著になったとも考えられる。

いい子症候群の若者たち

金間（2022b）は、このような昨今の若者像を「いい子症候群の若者たち」と称して、その特徴や背景を説く。

プラス面の特徴として、

- ・素直でまじめ、受け答えがしっかりしている
- ・一見さわやかで若者らしさがある
- ・協調性がある、人の話をよく聞く
- ・言われた仕事をきっちりこなす
- ・飲み会に参加する

などを挙げる。特に「まじめでいい子と評され、今年の新入社員は優秀だと噂されることも、もは

や毎年の恒例行事」と指摘する。

他方、マイナス面では、

- ・自分の意見は言わない
- ・言っても当たり前のことしか言わない
- ・質問しない、絶対先頭には立たない
- ・必ず誰か後ろに続こうとする
- ・学校や職場では横並びが基本、
- ・授業や会議では後方で気配を消し、集団と化す
- ・場を乱さないために演技をする
- ・悪い報告はギリギリまでしない

などを挙げる。

金間（2022c）は、これらの時代背景を次のように説く。まず、50歳以上を「競争とルールの世代」と称す。50歳以上の世代にとって、競争で勝つことが承認欲求を満たす方法と位置づける。この世代は、競争にはルールがあり、ルールを逸脱する行為に対して厳しいことが特徴的である。そして、競争は真の目的を意識しないで済み、競争の先に何があるのかといった本質論は脇に置いて「無思考」でいられ、また努力を結果に反映させやすかった。しかし、最近では、社会環境が変化し、努力はハラスメントになる場合がある。さらに、創造性のウエイトが高まったことから、競争も努力も聞かなくなった。努力と結果の関係性が薄れてしまい、努力を結果に反映しにくくなったと指摘する。

若者の救世主「社会貢献」

そのような競争という価値観が薄れていく中、若者の救世主として現れたのが「社会貢献」と金間（2022c）は位置付ける。

社会貢献には

- ・がむしゃらな感じがしない
- ・競争がない、評価されない、優劣がない、
- ・個人名が出るようなことはなく、匿名性が高い
- ・「無理せずできる範囲でやろう」という緩さがある
- ・無条件で多くの人から感謝される
- ・絶対に批判されることがない

といったイメージがある。これが若者にとって、承認欲求を満たす最適な材料となるからである。

「自分」より「周り」、「考える」より「察する」

金間（2023a）は、若者たちは承認欲求が強いが、目立ちたくないと言う。そのため、「誰かに決めてもらう」「前例にならう」「みんなで決める」という方法をとろうとし、自らの責任を回避しよ

うとする。金間（2023f）は、今の若者は自分より周りを優先する。若者の周りには、親、親戚、学校の先生、友人、知り合い、地域の人たちまで、助言者は多い。（加えて）彼らの助言には善意が含まれている。だから親はこれらをむげにはできない。こうして、「自分の正解」から「周りの正解」へと変化させていく。そのとき必要な能力は、「考える」ことより「察する」ことになる、と指摘する。

さらに、金間（2023d）は、若者の好姿勢に先輩世代は勘違いしやすいことも指摘する。若者は本当にコミュニケーション力が高く、多くのテンプレートをもっている。円滑かつ平穩に社会生活を送るための装備、それがテンプレートである。「今日は素で話させてもらいますね！」という雰囲気をもとって現れるため、多くの先輩世代は、この姿勢に騙されてしまう。そして、承認欲求は強いが目立つことを避けることも重要である。できないやつ、使えないやつと思われるのは避けなければならない。かといって、逆に意識高いやつ、と思われることも避けなければならない。上にも下にも出すすぎず、真ん中であることが安定と考える、と説く。金間（2022a）は、いい子症候群の若者たちには、「競争」より「協調」、さらに目立つ行為を控えるため「協調」より「同調」の圧力があると指摘する。これが昨今の若者像である。

2. コロナで浮き彫りになった若者像

鴻上ら（2020）は、「新型コロナの感染拡大は、日本および日本人のさまざまな面をあらわにした。それは、新型コロナによって新しく生み出されたものではなく、今までなんとなく水面下にあったり、自覚していなかったり、ほんやりとしか感じなかったことが、はっきりとしたかたちに、それも凶暴で陰湿なかたりになって現れてきたと感じる（3頁）」と述べる。例えば、日本のコロナによる死者の少なさに社会マナーが高いといった報道がなされたが、鴻上ら（2020）は、その要因として「同調圧力」に着目する。「同調圧力」とは、多数派や主流派の集団の「空気」に従えという命令であるとし、「数人の小さなグループや集団のレベルで、職場や学校、PTA や近所の公園での人間関係にも生まれる（5頁）」と指摘する。「日本の場合は、手を挙げる前にまず周りを見るわけですよ。周りが挙げていなければ、自分も挙げない（88頁）」『同調圧力は心の余裕もなくしてしまふ。宿題を忘れようが、友だちがいなかろうが、別に構わないといった気持ちになることができない。得体の知れない息苦しさを与えてしまいます。（中略）「他人に迷惑をかけない人間になれ」と言われて育ってきた（97頁）』からと説く。そして、このような息苦しい環境にあるために、「匿名だから、ネットでようやく一息つくことができる（132-133頁）」と続く。その根拠として、日本の「匿名率」が突出して高いことを挙げる。図6にTwitterの実名・匿名利用を、図7にSNSの実名公開における抵抗感を示す。図6より、日本のツイッターの匿名率は75.1%である。しかし、アメリカは35.7%、イギリス31%、フランス45%、韓国31.5%、シンガポール39.5%である。日本以外の匿名率は3~4割であり、日本の匿名率は著しく高いことがわかる。

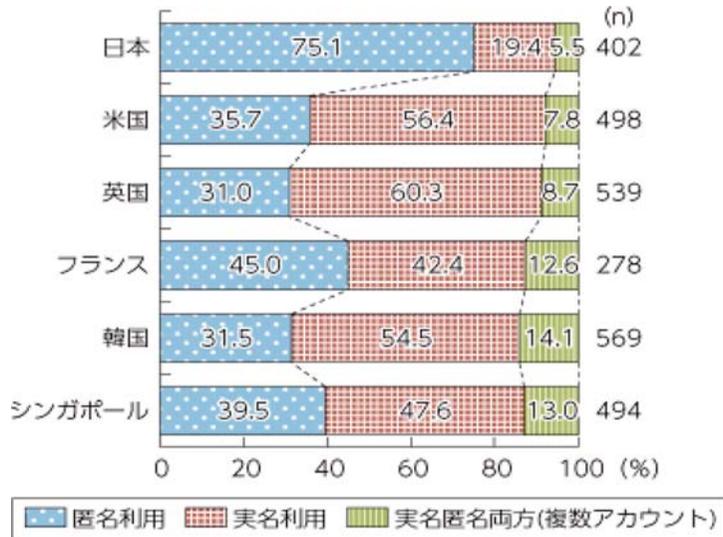


図6 Twitterの実名・匿名利用(引用:総務省平成26年(2014年)版情報通信白書「ICTの進化がもたらす社会へのインパクトに関する調査研究」図表4-3-1-16)

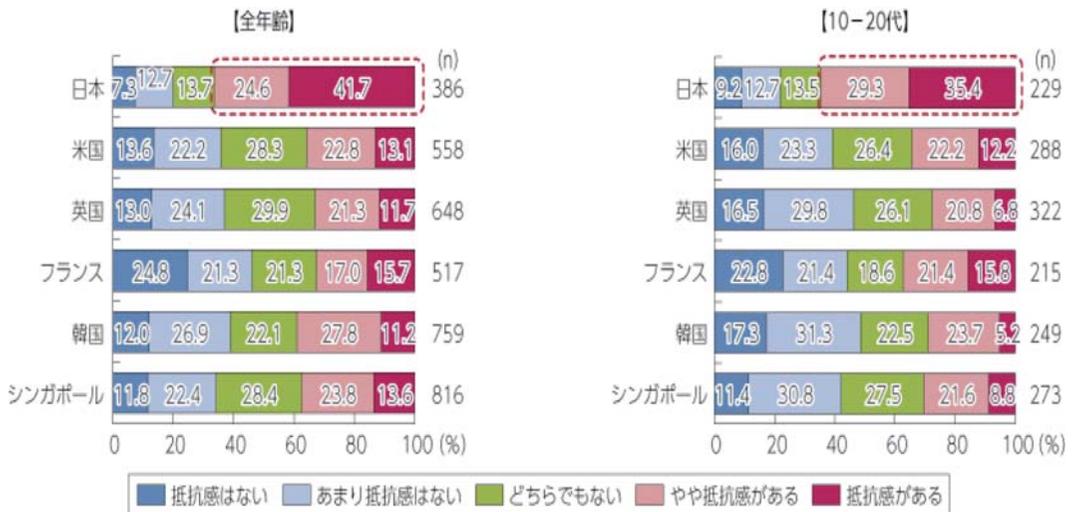


図7 SNSの実名公開における抵抗感(引用:総務省平成26年(2014年)版情報通信白書「ICTの進化がもたらす社会へのインパクトに関する調査研究」図表4-3-1-17)

「同調圧力」の他にも、似たような指摘がある。

永井(2021)は「共感」に着目する。『東日本大震災に対する「絆」に始まり、ラグビーワールドカップの「ワンチーム」、東京オリンピック・パラリンピック開催に向けた「団結」など(中略)最高に気持ちが良いくて恍惚すらできるものですが、よく見てみると、その中にいない人がたくさん存在していることに気が付きます。むしろ外側にいる人に対して排他的であることも珍しくありません(4頁)』と指摘する。「社会貢献の活動などへの寄付においても同じです。街頭募金、ホーム

ページでの寄付、クラウドファンディングのキャンペーン、ファン獲得のための広報などがある(43頁)」「詳しく考えるだけの背景知識やそのための時間を待てない、忙しく日々情報に囲まれている現代人を、いかにしてわかったように思わせることができるか。なにぶん情報は無限にあり、それを日々、瞬間瞬間で選んでいる状態にある。(中略) そんな中で、難しい問題を実直に伝えたところで共感を生むことはできません(45頁)」「なりふり構わぬ共感争いの中で、共感の獲得が手段ではなく目的となっていくケースも珍しくありません(46頁)」「そうなってくると、取り残されがちな社会問題(共感を得ることができない社会問題)はさらに取り残されていくだろうし、何よりそれらを取り巻く社会が歪んでいくのではないかと思えてなりません(47頁)」「共感されたいし、共感したい。(中略) その用法用量が適切であれば、の話です。オーバードーズしてしまうと、それぞれ共感中毒のような状態になり、いといろと問題が生まれます(48頁)」と、「わかりやすさ」が社会を歪ませている、と説く。さらに、『議論しよう』と言ってくる人って、「お互いにいいところを見つけていこう」ではなく、無意識に「こっちの意見に合わせろ」というスタンスになってしまっていることが多いと思う(108頁)』と言う。

泉谷(2006)は「普通」に着目する。『「普通」に生きることになれば「普通」に幸せになれると思込んでいるわけです(41頁)』『どこか窮屈さを感じながらも、「普通」におびえ、「普通」に憧れ、「普通」を演じるようになった。そして、わが子もそうやって生きるべきだと考えるようになったのです(42頁)』と指摘する。

これら「同調」「共感」「普通」の源流として、山本七平氏の「空気の研究」がある。山本(1983)は、『明治初期には、少なくとも指導者には「空気」に左右されることを「恥」とする一面があったと思われる。(中略) ところが昭和期に入ると「空気」の拘束力はしだいに強くなり、いつしか「その場の空気」「あの時代の空気」を一種の不可抗力的拘束と考えるようになった(221頁より抜粋)』と指摘する。現代の日本では“空気”はある種の絶対権威のように驚くべき力をふるっている。「空気の研究」(山本1983)は、あらゆる論理や主張を超えて、人々を拘束する怪物の正体を解明し、日本人に独得の伝統的発想、心的秩序、体制を探った名著として紹介される。

このように、「同調」「共感」「普通」および「空気」に関する文献をひも解くと、これまでに潜在していた日本特有の感覚が、若者にとっては「圧」となり、穏やかに、かつ、不可逆的に、若者の言動を制約するようになったと考える。

3. 昨今の傾向は過去からあった傾向

前述の「同調圧力」に着目した鴻上ら(2020)は、『若い人って、とにかく人とつき合うときに、お互いに傷つかないように、傷つけないように、その部分にもすごく気を使っていますよね。LINEのやり取りもそうでしょう。お互いにあつれきが生じないように、社会学の土井隆義さんが言うところの「優しい関係」を保っています(167頁)』と述べる。この引用された土井隆義氏を辿ると、「優しい関係」を次のように記す。土井(2008)は、『対立の回避を最優先する若者たちの人間関係を、本書では「優しい関係」と呼ぶ(中略)それはまた、他人と積極的に関わることで相

手を傷つけてしまうかもしれないことを危惧する「優しさ」の表われでもある。いずれにせよ、かつての若者たちにとっては、他人と積極的に関わることこそが「優しさ」の表現だったとすれば、今日の「優しさ」の意味は、その向きが反転している（8頁）』と記す。そして、『日本青少年研究所の所長である千石保が「マサツ回避の世代」とも呼ぶように、「優しい関係」の維持を最優先にして、きわめて注意ぶかく気を遣いあいながら、なるべく衝突を避けようと慎重に人間関係を営んでいる。しかし、このような互いの相違点の関係を避ける人間関係は、その場の雰囲気だけが頼りの揺るぎやすい関係でもある。だからそこには、薄氷を踏むような繊細さで相手の反応を察しながら、自分の出方を決めていかなければならない緊張感がたえず漂っている（9頁）』と続く。千石氏が「マサツ回避の世代」を出版したのは1994年（PHP研究所）である。このように「優しい関係」を辿ると、30年ほど前まで遡り、前述した「同調」「共感」「普通」と同じような傾向を掴むことができる。

生活の個人化と高度情報化が契機（1980年以降）

これらの現象の要因として、天野（2010）は、『1980年以降全国に普及したコンビニおよびファーストフード店、生活の個人化と高度情報化の進展等により、若者達は他者とのコミュニケーション抜きで生活でき、社会の中から断片化されたピースを好きなように組み合わせて「自分だけの世界」を構築できるようになった。』ことを指摘し、『それは若者達の精神的成熟を無視した都市開発と相俟って、脱社会化の原因とされる。その一方、労働のマニュアル化・コモディティ化は、コミュニケーションのバトルロワイヤルの状況や競争社会の舞台を避けて将来を見切り、馴れ合い気分の横並び待遇を好む「ジゾフレ人間」（深い関わりは避けるが横並び意識が強く、マニュアル志向で覇気がない、同調傾向が強い人間のこと）を生み出した。』と述べる。

しかし、さらに遡ると、月岡（1978）は、「自分本位で他人への思いやりがない」「合理的で、ものおじせず、積極的であるが、他人への思いやりに欠け、苦勞を知らず、常識や持久力にも欠けている」と指摘する。1980年以前に遡ると「自分本位」な若者の方が顕著であり、前述した「同調」「共感」「普通」のような観点と反対の状況にあったと考えられる。

正義より「ノリ」が支配する社会へ

1990年代のバブル崩壊後の様子について、千石（1994）は、『バブルが崩壊して、若者たちは「まじめ」になったのではないか。近頃の若者は、すっかりおとなしくなったのではないか。こういう人たちが、とても多い。残念ながらそれは間違っている。一步踏み込んでみると、「自己中心主義」がますます強まっていることがわかる（1頁）』と記す。『「自分探し」「自分の好み」を追求すればするほど、会社とも対立し、友だちとも対立する。自分に忠実であろうとすると、仕事もおざなりになるし、友だちともまずい関係になる。かくして、新しい若者問題は、組織や友人、そして、社会とも対立葛藤をもたらすようになってきた。（2頁）』（その結果）『友だちは友だちのふりをしているだけ、親や親のふりをしているだけで、叱ったり反論したりしない。たぶんそれは、こ

うでなければならない「理念」を喪失したからであろう。(3頁)』と続く。『理念が崩壊すると正しい目標がなくなるから、どんなことも「等価」になってくる。相対的思考が生まれてきて、「それも良い」「これも良い」「自分が好きならそれで良い」という考えになる。(13頁)』と、絶対的な理念や目標の喪失が、相対的な思考を生んだと説く。そして、日本は正邪善悪の規範が空洞化し、「ノリ」が支配するようになった。「ノリの世界とは、まじめを基盤としたルール、規範が空白状態になっているからで、若者たちの頭には規範がないのである。問題が起きてても、冗談、冗談で済ませてしまう。(中略)正義より冗談のノリが支配している(84-85頁から改変)」と指摘する。

目標のない社会となり、若者は理念を見失う

当時の背景として、千石(1994)は、『日本の教育も産業社会人の育成をめざしていた。その根本にあったのが、未来指向性だった。やがてのために、「いま」を耐える徳性の養成だった。だが社会が変わった。(73頁)』「若者たちは出世したり成功したりに魅力を感じなくなった。それが日本での理念や目的ではなくなったから(78頁)」と述べる。そして、『学校でも家庭でものびのびと創造性豊かな人間を教育の目的にするといいながら、こっそりいうには、偏差値をあげること、受験科目だけを勉強することを奨励した。そのとき決まって先生も親もこういった。「やがておまえの得になるんだから」。あるときは「のびのび」、あるときは「おまえの得になるんだから」という言い方は、明らかに一貫性を欠く。高度消費社会はもはや、日本の若者を社会化すべき理念を失ったのだ。(136頁)』と、産業人の育成を目指した社会が変わり、教育の一貫性が欠け、若者は社会に対する理念を失ったと説く。

以上を整理すると、1980年以前にあった「自分本位」(月岡1978)が1980年以降に「自己中心主義」となっています。そして、1990年代のバブル崩壊後には社会規範が空洞化し、絶対的な善悪より、周りに合わせる「ノリ」を重視する若者が増えた。その結果、「マサツ回避」(千石1994)、「優しい関係」(土井2008)、「普通」(泉谷2006)といった現象を起こし、コロナ禍には「同調圧力」(鴻上ら2020)、「共感」(永井2021)と続いた。そして、「いい子症候群の若者たち」(金間2022a)を生み出したと考える。1980年頃から潜在していた若者像が、1990年、2000年、2010年と経るなかで、少しずつ形を変え、現在に至る。これらは、数十年に渡って徐々に変化してきたため、大勢が見落としやすい環境となった。それが社会の流れとなり、若者たちが世代を超えて飲み込まれてきたのではないかと類推する。

4. 改善できるのか

我々は、1990年代から約30年も続くような現象を改善することができるのだろうか。明確な方策は見当たらないが、その可能性を探りたい。

まず、科学的な側面から、京都大学(2022)は、「社会の絆や共感という一見ポジティブとみなされやすい概念の両面を、分析的レビューと質的調査によりコロナ禍の体験と関連づけ、認知の柔軟性という解決法を提示し、集団間の対立等の一般的な社会問題への提言」を行った。分析の結果

から、「人々のつながりを大切にする態度や共感を伴う表現はソーシャルメディア等を通じて孤独感を和らげる一方、同調圧力によりうわさや中傷を恐れたり、自分とは異なるグループに対する偏見（例：非ワクチン接種者）や攻撃的行動とも関連しうる事」を示唆した。そしてコロナ禍の様に、刻々と状況が変わる様な場面では、特定の思いに固執せず、色々な視点で柔軟に出来事を理解する傾向の人々の方が、対立や葛藤に対してより適応的な傾向も示した。つまり、「同調圧力」は科学的な側面からも指摘され、コロナ禍のような刻々と状況が変わる場面では、色々な視点で柔軟に理解する人が社会に適応しやすいことを示唆する。そこで、「色々な視点で柔軟に理解する」ことに注目して、その可能性を以下に探る。但し、色々な視点から可能性を探ることを優先し、検証は十分ではないことを、お許し願いたい。

1つ目に、実践的な側面から、1990年代半ばから聞かれるようになった「ネット依存症」を挙げる。ネット依存症の症状として、樋口（2013）は、自己中心的な考えに傾く、攻撃的になる、いつもイライラしている（89頁）などを挙げており、前述した「同調」「共感」「普通」の特徴と異なる。しかし、『眺めているだけなら「安全に」みんなとつながれる、閲覧しても発言しない。なぜなら、発言をしてしまうと今度はやり取りをしなければならぬからです。それはしんどい。だから、ただ眺めている。その選択をよしとしてくるネットは居心地のいい場所であり、ほんやりとしたものでも、つながっている感覚はEさんにとって大きな救いになっています。（100-101頁）』とある。これらは、他人と積極的に関わることで相手を傷つけてしまうと考える「優しい関係」（土井2008）や、なるべく衝突を避けようと慎重に人間関係を営む「マサツ回避」（千石1994）と共通するところがある。そこで、「ネット依存症」の治療方法から改善のヒントがあると考えた。

その治療方法のポイントとして、樋口（2013）は、

- ・「様子を見ましょう」が治療を遅らせる（128頁）
- ・「すぐに元の状態に戻る」のが依存の特質、単にネットの使用時間を減らすことではない。いかにネットを使わない時間を増やし、より健康的な活動に置き換えていけるかどうか（130頁）
- ・運動してみると、体が弱っていることに気づく（144頁）
- ・多くの人と一緒に食事をする 것도治療につながる（146頁）
- ・回復後に重要なコミュニケーションスキルを磨いておく（148頁）
- ・薬の治療は、基本的に行わない（152頁）
- ・見守ってくれるボランティア大学生たちの存在（158頁）
- ・本人の自覚が治療の出発点（161頁）

などを挙げる。つまり、様子を見ることは改善を遅らせ、薬のような特効薬はない。よって、何かしらのアクションが必要である。また、本人の自覚が出発点にあり、運動や食事、健康の意識が作用すると解釈した。

続いて実践的な側面から、2つ目として、2023年の夏に開催された第105回全国高等学校野球選手権記念大会を挙げる。優勝した慶應義塾高校は、自由な髪形を始め、選手の取り組み姿勢が話題になった。東京新聞（2023b）は、『107年ぶりに栄冠をつかみ取った慶応は「エンジョイ・ベース

ボール」を掲げて躍動した。目指したテーマは「常識を覆す」こと。高校野球を巡る固定観念を変えようと挑み続け、日本一の座にたどり着いた。』と報告した。監督の森林貴彦氏は、小学校の担任でありながら高校の野球部の監督を務める。森林（2020）は、高校野球には、教室の中だけでは決して手に入らない3つの価値があるとして、「①困難を乗り越えた先の成長を経験する価値、②自分自身で考えることの楽しさを知る価値、③スポーツマンシップを身に付ける価値（2頁）」を掲げる。また、指導上の留意点として、『そもそも子どもは、自然と成長していくものです。時折、「あの選手は俺の教え子だから」といった態度を取る指導者がいますが、それはまったくの見当違いで、子どもの心身は未熟な部分が多いからこそ伸びしろがあり、大人が特に手をかけなくても成長していきます。大人の役割は、その成長の邪魔をせずに手助けすること。これがとても大事です。多くの大人がよかれと思い、子どもあれこれと手を出しがちですが、それは逆に子どもの成長を阻害しているのではないのでしょうか。（14頁）』と指摘する。手をかければかけるほど良くなるという簡単なものではない。「指導することが成長の邪魔になっているのではないか」という認識をもつ必要性がある。指導することで良くなることもあるが、逆に悪くなる可能性もある。指導者はそういう事態に対する恐怖心を常に持っておかなければいけない。欠如すると、口では「子どもたち、選手たちを勝たせたい」と言いながら、結局は自分が勝ちたいというタイプになってしまう（15頁から抜粋して改変）。「大切なのは、選手たちが「俺たちが主役だ」と思えるかどうか（67頁）」であり、『「見ている」「観察している」ことを伝えるために、そのサインとして会話が必要（37頁）』と記す。つまり、選手の主体性を第一にすること、そのために困難を乗り越えた先の、成長の価値を体感させること、その他方で指導が成長の邪魔になっていないかを自問自答することが大事だと解釈した。

「指導が成長の邪魔になる」ことについては、似たような指摘がある。生物学者であり、歌人でもある永田（2018）は、「大学の教師は親切すぎではいけない（93頁）」と述べる。それは自身の経験にも基づく。私は『50年前、京都大学に入学したときの総長の祝辞で「京都大学は、諸君に何も教えません」（12頁）』と言われ、度肝を抜かれた。そのあとどう続いたのか、ほとんど忘れてしまったが、「自分で求めようとしなければ、大学では何も得られない」のような風に展開したのではないだろうか（12頁から抜粋して改変）と続く。そして、大学の学びとは『すでに「わかっていること」を習得、すなわち学習することも大切であるが、より大切な学びは、すでに「わかっていること」のすぐ横にまだこんなに「わかっていないこと」があるのだということをも例を持って示すこと、気づいてもらうことではないだろうか。（50頁）』また、「最初から安全なほうを選んだ場合には、それで何かが変わるという可能性はきわめて低い。常に安全なほう、安全なほうを選び続けていく人生は、どんどんその人の人生を小さなものにしていくだろう。（99頁）』『失敗のなかにこそ、「知」集積を、「知の体系」を、個々の場合に応じて、個々の状況に対応して、いかに組み替えて、その場に固有の「知」として再構成できるか、それをみずからの手で行えるように訓練する期間だと考えている。それが「知の体力」ということである。（144頁）』と説く。つまり、教えすぎではいけないこと、習得したことの横に学びの機会があること、そして、失敗の積み重ねか

ら体得することが大事だと考えた。

以上、科学的、実践的、学際的な側面から改善策の可能性を探った。しかし、整合性など、検証は不十分であり、論理の飛躍があるが、次の一案をまとめとして、お許し願いたい。

- ・改善には、本人の自覚を促すことが出発点となる。本人の自覚とは、本人が習得したことを使い、そのすぐ横に未知の領域がまだまだあることを実感させることである。これは、大学の学びでもある。
- ・その際、困難を乗り越えられるかどうかを見守ることが肝心となる。見守りには、失敗の積み重ねが必要であり、指導が成長の邪魔になっていないか自問自答する。また、運動や食事、健康の要素を散りばめるとよい。
- ・薬のような特效薬はなく、様子見は改善を遅らせるだけである。我々はアクションを起こさなければならぬ。

5. おわりに

今回、コロナ禍の影響を受けた若者像に着目し、その特徴に関する文献を調査した。そして、その根源と考えられる背景を調べると、協調、同調、共感、普通といった日本特有の感覚が若者への圧となって現れ、加えて、この現象は1990年頃の若者像にまで遡ることがわかった。さらに、改善策について調べていく内に、大学の学びを問い直すことに至った。ここで、改めて学びを問い直すうちに、学びに否定的な考え方に辿り着いた。それは、思想家であり、神父でもあったイリッチの学校廃止論である。彼は、1971年に社会の脱学校化をはかり、公教育の荒廃を根本から見つめなおす問題提起を行った。学校を無くすのではなく、学校制度の否定を主張したのである。その翻訳（イヴァン・イリッチ著、東洋・小澤周三訳1977）によると、学校では『新しい論理がとられる。手をかければかけるほど、よい結果が得られるとか、段階的に増やしていけばいつか成功するとかいった論理である。このような論理で「学校化」されると、生徒は教授されることと学習することを混同するようになり、同じように、進級することはそれだけ教育を受けたこと、免状をもらえればそれだけ能力があること、よどみなく話せれば何か新しいことを言う能力があることだと取り違えるようになる。彼の想像力も「学校化」されて、価値の代わりに制度によるサービスを受け入れるようになる。（13頁）』と指摘し、社会の学校化に対して警笛を鳴らした。「学校教育の基礎にあるもう一つの重要な幻想は、学習のほとんどが教えられたことの結果だとすることである。たしかに、教えることはある環境のもとで、ある種類の学習には役立つかもしれない。しかしたいのいの人々は、知識の大部分を学校の外で身に着けるのである。人々が学校の中で知識を得るといいうのは、少数の裕福な国々において、人々の一生のうち学校の中に閉じ込められている期間がますます長くなったという限りでそう言えるにすぎない。ほとんどの学習は偶然に起こるのであり、意図的学習でさえ、その多くは計画的に教授されたことの結果ではない。普通の子供は彼らの国語を偶然に学ぶのである（32-33頁）」「われわれが知っていることの大部分は、われわれが学校の外で学習したものである。生徒は、教師がいなくても、否、しばしば教師がいるときでさえも、大部分

の学習を独力で行なう（64頁）」とある。つまり、学校は、学習者にとって、生涯の学習の一部にすぎないのに、学校で教えられたことが、社会を支配していることに対して、警笛を鳴らしている。そして、訳者はあとがきで、これは「社会の教育作用を人間的でみずみずしいものとして賦活しようという、理想主義的な挑戦なのである（230頁）」と記す。「人間的でみずみずしいもの」とする挑戦を、今こそ追うべきではないか。我々は何を目指しているか。足元を見直し、原点に立ち返る必要があるのではないか。

数学者である遠山（1980）は、「あらゆる教科はそれだけでは全能ではない（78頁）」と指摘する。「おおよそ親たちが教育に対して抱いている要求は、“よい子にしてくれ”と“飯の食える子にしてくれ”ということの二つであろう。“よい子”が理想主義的な要求だとすると、“飯の食える子”は現実主義的な要求であろう。“よい子”に対する要求は、それをおし広げていけば、“よい社会”への要求へと発展し得るものであり、ひいては社会の改造へとつながるものをもっている。これに対して“飯の食える子”は“飯の食える社会”へつながり、大きく言えば、社会の持続という目標と結びついてくる。つまり、親たちの願いは、自分の子どもだけに対する“個人の改造”と“個人の持続”という形を直接的にとりつつも、それが“社会の改造”“社会の持続”という目標と間接的につなげていると言えよう（30頁）」と述べ、教育の目標として、次の2つを挙げる。

- ① 社会の持続
- ② 社会の改造

遠山（1980）は、「教育がなかったら、社会は改造されないばかりでなく、持続することさえ不可能なのである（25頁）」と指摘し、社会の持続に奉仕する教科の必要性を訴える。昨今、SDGs（Sustainable Development Goals）の推進もあり、持続可能な社会を目指す活動が多くなっている。今までに「なかった」（新たな）持続可能性に関心を寄せやすいが、今までに「あった」取り組みの中に、持続可能性を「持続」するための教育が必要であることを忘れてはならない。

〈引用文献〉

- 天野徹（2010）「現代の「若者像」と彼らが置かれている「状況」の矛盾について－統計データに見る若者像再考の必要性」情報誌 CEL（94）、大阪ガスネットワーク㈱ エネルギー・文化研究所
- 泉谷閑示（2006）『「普通がいい」という病』講談社
- イヴァン・イリッチ著、東洋・小澤周三訳（1977）「脱学校の社会」東京創元社、Ivan Illich: Deschooling Society（1971）の全訳
- 金間大介（2022a）「いい子症候群の若者たち 先生、どうか皆の前ではめないで下さい」東洋経済新報社、2022、103-106
- 金間大介（2022b）『人事・総務担当必読 激増する「いい子症候群」への対処法』週刊新潮、新潮社、40-44、2022年8月4日号。より抜粋して拙者改変
- 金間大介（2022c）「複雑化・巧妙化する、若者の承認欲求」Voice（539）、PHP 研究所、154-161、

- 2022-11. より抜粋して拙者改変
- 金間大介 (2023a) 「とにかく正解を求める若者たち」 Voice (543), PHP 研究所, 202-209, 2023-03. より抜粋して拙者改変
- 金間大介 (2023b) 「若手が求める理想の上司像とは」 Voice (544), PHP 研究所, 198-207, 2023-04. より抜粋して拙者改変
- 金間大介 (2023c) 「Z 世代のナイーブな SNS 事情」 Voice (545), PHP 研究所, 202-209, 2023-05. より抜粋して拙者改変
- 金間大介 (2023d) 「『一対一だとちゃんと話せる』は本当か」 Voice (546), PHP 研究所, 204-213, 2023-06. より抜粋して拙者改変
- 金間大介 (2023e) 「ゆるブラックを避ける若者の深層心理」 Voice (547), PHP 研究所, 202-211, 2023-07. より抜粋して拙者改変
- 金間大介 (2023f) 「新人研修を終えた若者たちへ」 Voice (548), PHP 研究所, 200-207, 2023-08. より抜粋して拙者改変
- 京都大学 (2022) 「社会のつながりのうらおもてー新型コロナウイルス感染拡大の実態調査とグローバルな対立への教訓ー」 ニュースリリース 2022. 6. 30 公開 <https://www.kyoto-u.ac.jp/ja/research-news/2022-06-30> (2023 年 9 月 18 日閲覧)
- 鴻上尚史・佐藤直樹 (2020) 「同調圧力 日本社会はなぜ息苦しいのか」 講談社現代新書、P3, 88, 97, 132-133
- 千石保 (1994) 「マサツ回避の世代ー若者のホンネと主張」 PHP 研究所
- 総務省 (2014) / 平成 26 年版 情報通信白書
<https://www.soumu.go.jp/johotsusintokei/whitepaper/h26.html> 第 4 章 ICT の急速な進化がもたらす社会へのインパクト / 第 3 節 安心・安全なインターネット利用環境の構築 図表 4-3-1-16 及び図表 4-3-1-17
- 東京新聞 (2023a) 『3 年となったマスク生活、いつになったら外せるのか 強制ではないのだが…「トラブルが怖い」』 2023.1.21 記事: <https://www.tokyo-np.co.jp/article/226458> (2023 年 9 月 18 日閲覧)
- 東京新聞 (2023b) 『「きれいごと」と言われた慶応のエンジョイ・ベースボール 107 年ぶり優勝「髪型で議論、まだまだ」』 2023/8/23 記事: <https://www.tokyo-np.co.jp/article/272088> (2023 年 10 月 2 日閲覧)
- 月岡東一 (1978) 「現代の若者像」 日本醸造協会雑誌 73(7), 512-518.
- 土井隆義 (2008) 「友だち地獄ー空気を読む世代のサバイバル」 ちくま新書
- 遠山啓 (1980) 「遠山啓著作集数学教育論シリーズ 1 「数学教育の展望」」 太郎次郎社
- 永井陽右 (2021) 「共感という病」 かんき出版
- 永田和宏 (2018) 「知の体力」 新潮社
- 樋口進 (2013) 「ネット依存症」 PHP 新書

ベネッセ教育総合研究所（2022）「第4回大学生の生活実態調査報告書（データ集）」：

<https://berd.benesse.jp/koutou/research/detail1.php?id=5772>

森林貴彦（2020）「Thinking Baseball－慶應義塾高校を目指す”野球を通じて引き出す価値”」東洋館出版社

山本七平（1983）「『空気』の研究」文春文庫

読売新聞（2022）『今の大学3年生、「対人スキル」低め…コロナ禍で授業やサークル制限の影響』

2022/12/17記事：<https://www.yomiuri.co.jp/national/20221217-OYT1T50135/>（2023年9月18日閲覧）

alue（2023）「Z世代の教育方法とは？特徴や接し方のポイント」2023.6.7記事：

<https://service.alue.co.jp/blog/how-gen-z-is-educated>（2023年9月12日閲覧）

d's JOURNAL（2023）「Z世代の特徴とは」2022.03.29記事：

https://www.dodadsj.com/content/0329_generation-z/（2023年9月12日閲覧）

NHK（2023）「マスク着用状況調査 2022年からおおむね横ばいの状態」2023.3.26記事：

https://www3.nhk.or.jp/news/special/coronavirus/mask/detail/detail_38.html（2023年9月18日閲覧）

Science Portal（2023）『「コロナとの共生」の日常で感染拡大第9波に 今夏賑わい戻るも専門家は注意呼び掛け』（2023.08.15記事）、科学技術振興機構：

https://scienceportal.jst.go.jp/explore/review/20230815_e01/（2023年9月12日閲覧）